



山本正の私信「詩歌礼賛と愚訳精進」を読む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010605

山本正の私信「詩歌礼賛と愚訳精進」を読む

木村哲也

はじめに

愛知県岡崎市に住む、山本正という、小生よりは年長とみられる（娘さんが結婚しているというくだりあり）、漢詩を創作されている方から、このところ、個人誌のお礼にお手紙などをいただいている。

さて、昨年十一月、「詩歌礼賛と愚訳精進」と題し、「東海豪雨を歌いフランス俳句を紹介する 山のあなたを訳し俳句の英訳を試みる」という副題のついた小論を、事実上、「私信」の形でいただいた。

個人的にお返事するだけで、もちろんかまわないはずであるが、非常に興味深いものであるので、あえて公開して、論じさせていたいくことにしたい。

一 東海豪雨の七言絶句

冒頭は、東海豪雨を題材に創作した七言絶句である。

猛（はげ）しき雨の、俄然（にはか）に尾州を襲ひ、水は徒歩

（あゆみ）を妨げて、泥の流れと化（なれ）り。この身は難を逃れて、女（むすめ）の家（むすめ）に寄せば、灯のもと閑（しづか）なる談（はなし）の余（あと）に、心始めて休（やす）らひぬ。

為夜雨所妨婦并序

猛雨俄然襲尾州

水妨徒歩化泥流

此身逃難女家寄

灯火談余心始休

夜雨に帰るを妨げらる・ならびに序

猛雨の俄然として尾州を襲う

水は徒歩を妨げて泥流と化す

此の身は難を逃れ女家に寄す

灯火の談余よ心の始めて休む

旧字旧かなでなく、文字どおりの文語文と、創作漢詩、その書き下し文のハーモニーがおもしろい。たまたまか、書き下し文は、各行同字数だ。

さて、このところ個人的に、漢詩と見れば、口語押韻定型訳にしている。この漢詩でもやってみることにしたい。

俄然（がぜん） 大雨 名古屋を襲い

泥流のため 歩くの遅い

着いた ようやく 愛す娘（こ）の家

話 しばらくわが心 癒え

最低限の解説をすれば、一行を七七に訳し、隣り合った行と、少なくとも二母音一子音の二重韻を踏む、ということを守っている。

ここでの行末は、「襲い」「遅い」、「家」「癒え」というように、動詞活用形とではあるが、同音異義語になってしまった。重なる音節数は二母音一子音よりも多くなっているが、その分だけ効果があったかはわかりにくい。

ともあれ、ハーモニーが一つ増えたと言えるのではないだろうか。

二 芭蕉のクーシュによる仏訳

続いて、芭蕉の「しら露もこぼさぬ萩のうねり哉」という句に、

クーシュが《Oh! Le lespedeza tremblant / Qui ne laisse pas tomber une goutte / De la claire rosee》という訳をつけているのを引

いて、ポール・ルイ・クーシュのことを述べている。その著書のおいてのことを引こう。

ハイカイを定義して「一句五音節、二句七音節、三句五音節の全体で十七音節からなる無韻詩で音節の長短も強弱もない三行詩」であると述べている。一般的に言えば、西洋の定型詩には、強弱や長短のリズムと脚韻・頭韻があり朗読して快感を感じたり、人間の内面的秩序に同調して感情によく訴えるのだが、俳句では十七音の音数律を基本に、簡潔性とこっけいや暗示力によって情感を動かすものとクーシュは考えていたであろう。

趣旨がわからないところがなくはないが、ヨーロッパ語本来は脚韻などがあるのに、俳句は音数律に頼るのみで、その翻訳も、韻はなく律のみだと言いたいのであろう。

フランスでは現在、無韻の日本語のアニメソング「キャンデイキャンデイ」の歌詞を、直訳ではなくても韻を踏んで訳した例もある。また、後述の漢俳でも韻を踏んだりもする。

また、例えば本来、韻を踏んでいる歌詞は、多少内容がずれても韻を踏みながら訳している場合もあるようで、ヨーロッパ語ではその程度には脚韻は重視される。

クーシュの意図はよくはわからないが、とりあえず韻なしで、雰囲気を近づけたかったということであろうか。

ヨーロッパ語らしくはないが、ある意味では、脚韻を踏んでこなかった特殊性をクロソズアップする意図があったとしたら、ある意

味では大いに賛成したい。

三 クーシュのフランス語による俳句への解釈

さてその先では、訪仏中の高浜虚子に会ったクーシュが書きつけた、フランス語による俳句を訳して感想を述べておられる。

Dans un monde de rosée

Sous la fleur de pivoine

Rencontre d'un instant

露の世に牡丹の花の下でたまたゆらの出会い

露の世の牡丹咲きたる出会いかな

このクーシュの原句を精緻に読むと、仏語の口語的な表現でなく、いかにも詩的であつ東洋的な表現を凝らしていることに気づく。「露の如きはかない現世」を「露の世」と詩的な隠喩で表している。もしも仏語風に言えば《un monde éphémère》（つかの間の世）となる。仏語の《rosée》には「はかなき」の意はまったくなく、和語のつゆにも漢語の露にも「はかなき」を伴なう。漢書の蘇武伝に「人生如朝露」とか源氏物語の夕霧に「つゆのあはれをばさしおきて」（つゆのようににはかないこの世の無常を捨てて）の例がある。自国語にはない表現をあえて「露の世」と第一句に用いたのは、クーシュが俳諧を研究する中で身につけた一

つの技法ではないか。或いは現世《monde》を飾る形容詞の「はかない」《éphémère》を使用すれば、詩らしさに欠ける事を承知していたのかもしれない。この仏語の「はかない」をここで利用すれば、第三句の「つかの間の出会い」の「つかの間」《instant》（「一瞬」の意味）と意味がダブル「ママ。名詞でなく動詞なので「ダブる」とすべき」のを避けたとも考えられる。形容詞を用いずに、多用途を持つ前置詞《de》（「の」を意味する）により限定したり、同格を表わしている手法を見ると、実作に如何にクーシュが心血を注いで来たかよく理解できる。虚子は「きわめて俳句的である」と評価している。

長い引用になったが、率直に感想を述べることにしたい。まずもって、クーシュのハイクも、山本の俳句の形の訳も、かなり優れていると思う。

また、山本のフランス語の解釈も、最後の *le* に関する部分を除いては、小生なら違う書き方をするだろうが、まずは悪くない。では、その *le* の解釈について述べたい。形容詞を用いずに、という箇所があるが、例えば「日本の」なら *du Japon* の他に *japonaïs* とも言えるものの、「露」を表わす *rosée* にはそのような形容詞形がないから、「やむなく」*de rosée* としたまでであるだけだ。そして *le* は多くの用途が確かにあるが、ここでの *le* は、そのことに関係なく一義的である。この俳句に心血を注いでいることは否定はしないが、この部分についての山本の言及は、率直なところの外れかつ大げさとしか言えない。

その前のほうは、基本的にはよいが、要するに、フランス語で《monde de rose》（露の世）と言って、日本語の「はかない」という含蓄がなくやや唐突なところを、《rencontre》（出会い）に《d'un instant》（たまゆら）のという修飾語句をつけて補っている、という筋が、必ずしも読みやすくはない。

また、あえて難癖をつければ、「はかない」を意味するフランス語が《éphémère》でなく《momentané》に途中から変わっている。しかも、後者を使用すると詩らしさに欠けるとするのは、どういう根拠か知らないが（もちろん、小生自身、フランス人のようにフランス語ができるわけではないが、《d'un instant》同様の語で、特に詩らしさに欠けるようにも思われない）、やや断定的すぎよう。しかし、他の訳を見るまでもなく、第一句に自国的でない表現を出すのが一つの技巧、という着眼は、なるほどどうならされる。その先を引きたい。

虚子は滞仏期間の日仏交流の中で季題の重性「ママ。重要性か」を説いた。何故ならフランス・ハイカイには季語がないと言うより無関心であり、十七音節に専ら意を注ぐばかりの実状を虚子は嘆いたのである。俳句の季題を無視したフランス・ハイカイの原因を虚子はクーシュに求めた。その罪を負わされたクーシュが虚子に、季の異なる季題付きの句（夏の牡丹と秋の露）を献上しているのは誠に皮肉なことである。クーシュの原句をじっと考えながら、俳句らしい俳句を誰に学んで作ったのか自問してみたが、

翻訳によって俳句づくりのコツを体得し、実践したのではないかと推察する。

季語の問題は難しい。日本人が日本語で俳句を作るにしても、京都から見て北海道や沖縄では季節感が違うと思う。また、南半球でや、温帯地域をはずれたところでは、なお違ってくると思われる。また、生活風習のの違いで使われない季語や、逆に使いたくなる季語があるはずだ。

それゆえ、虚子の追及も、またそれを採り上げる山本の意図も、そのあたりを配慮した書き方でなければ、必ずしも妥当なものとは思にくい。

また、十七音節に意を注ぐばかり、とあるが、現代俳句協会のアソソロジイに載っているフランス語による俳句は、三行とはいえ自由律のものまであるから、「十七音節に意を注ぐ」ことは、それなりに悪くない。

脱線するかもしれないが、ソネットを日本に採り入れた際だって、立原道造も谷川俊太郎も、行数の十四行に固執し、「十四行詩」などという訳語まで定着させ、肝腎かなめの脚韻を考えていない。それを諸外国から嘆かれてもいない。

マチネポエティクを試みだって、詳細は省くが、とてもヨーロッパ語の脚韻を学んでの応用とは思いがたい。

それに比べれば、批判はもちろん妥当だが、季節違いの季重ねとはいえ、反応があったことはよいではないか。

またその先を引くことにしたい。

クーシユが俳句らしい俳句を虚子に捧げたが、私も仏訳し美しい仏語で朗読してクーシユへ献じよう。

鶯や草にいねつつ夢心地

Ah! le chant d'un rossignol

Je me suis couchée sur l'herbe

En faisant un rêve

(ああ一匹の鶯の歌／私は草の上で横になっている／夢を見ながら)

日本にしかないウグイスを仏語で「ロシニョル」夜鳴き鶯(英語ではナイチンゲール)で以て訳すのは心苦しい。鳥の鳴き声をフランス語でシャン《chant》と言う。草はエルブ《herbe》と綴る。英語のハーブ(野草)と同義語。「寝ぬ」は横になるの仏語《se coucher》を使う。「夢心地」は「夢を見つつ」と直訳する。

本来、翻訳というものは母語に向かって行ない、外国語へは訳すべきではないと思うが、ともあれ率直に論評してみよう。

フランス語の音綴が、きちんと五七五になっているあたりはさす

がである。二・三行めは無音の。で終わっているが、行中ならともかく行末ゆえ音綴数に入れないということ承知されているあたり、大したものである。

ただし、動植物はどうしても翻訳ではズレが生じる。訳語選びは悪くないのに、ウグイスの訳語が「心苦しい」とかの言いわけは、むしろ興ざめである。こんな言いわけをするなら、翻訳をするべきではない。

さて、鳥が鳴くことも、フランス語では「歌う」《chanter》で表わすから、鳴き声は名詞形の「歌」《chant》となる。「シャンソンの語源の《chanson》も「歌」の意味はあるが、鳥の鳴き声にはならない。

冠詞についても、フランス語では前に出るこの《chant》に定冠詞、後になる《rossignol》が不定冠詞というあたりもまずまずである。後者では、音綴数が変わらないから複数形もあり得るが、私としても訳すなら単数のほうがよいと思う。また、意味の違いはここでは詳述しないが、無冠詞というフランス語もあり得るのに、知ってか知らずかベストの不定冠詞というあたりも、さすがに仏訳を試みるだけのことはあるか。

次行も基本的にいいのだが、気になるところが二か所ある。

まず、「寝る」のであって「眠る」のではないから、《dormir》でなく《se coucher》なのはよいと思われるが、複合過去形に活用させた時、なぜか女性単数に性数一致している。ケアレスかもしれない。

また、草の訳も《herbe》でよいが、英語なら“grass”に当たる語

だと思われる。形は似ているが、「同義語」はやり過ぎと思われる。少なくとも日本語での「ハーブ」とはかなり意味が違う。

三行めをジェロンドンで訳すのは、まずまずであろう。「夢を見る」に当たる表現のフランス語の動詞と名詞の関係も、不定冠詞単数形の選択も含め、ベストと信ずる。

ただし、「直訳」とか「意訳」とかいう言葉は、個人的には好きではないし、「夢心地」を「夢を見つつ」と訳しているから、むしろ使うなら「意識」というべきではないか。

さて、ここまで見ても、フランス語の十七音綴は、どうしても日本語の五七五より情報が多くなる気がするが、ましてこれを漢訳すれば、なおのことだと痛感したのが以下である。

この拙句を漢訳すれば、こんな風になると思う。

孤鶯何婉轉

征途来臥芳草径

暫得世外情

孤鶯なんぞ婉轉（えんてん）たる

征（たび）の途に來りて臥す芳草の径

しばらく得たり世外の情

旅の途中、作手「（つくで）」の白鳥の野原で若草もえる道に横たわり、二匹の鶯が茂林の中で美しく囀るのをじっと聴いている。

しばらく俗世を離れた清々しい気持ちになる。

漢俳というのがあつた。個人的には一時期は熱中したが、種々の事情で今は遠ざかってしまった。

はからずも、その漢俳の形だ。ただし、それにも脚韻は踏むことがあるから、この場合は無韻になつてしまった。知つてか知らずか、創作漢詩の名手なのに残念だ。

ともかく、内容は問題ないが、情報量が全然違う。ここでは使つておられないが、「翻案」に近い。

四 カール・ブッセの「山のあなた」

突如として、カール・ブッセの「山のあなた」が、『海潮音』に収められた上田敏訳、ドイツ語原詩、直訳、意訳、漢訳が出てくる。

山のあなた

山のあなたの空遠く

「幸い」住むと人のいふ。

噫、われひとと尋めゆきて

涙さしぐみ、かへりきぬ。

山のあなたのなほ遠く

「幸い」住むと人のいふ。

Über den Bergen

Über den Bergen weit zu wandern,
Sagen die Leute, wohnt das Glück.

Ach, und ich ging im Schwarme der Andern,
Kam mit verweinten Augen zurück.

Über den Bergen weit, weit drubern,
Sagen die Leute, wohnt das Glück.

山々の向こうに (直訳)

遙かに旅する 山々の向こうに
幸福が住むと 人が言う
ああ そして 私は仲間に加わり 旅立った
泣きはらした目をもって 帰って来た
山々の向こうに 遙かに遙かに なお遠くに
幸福が住むと 人が言う

峰をこえゆけば (意訳)

なが旅の こえゆく峰の かなたには
幸ありと 言ふぞかし
かく思ひ やからと共に 尋ぬれば
泣きぬれて 帰りきぬ

かの峰の 遙かに遠き かなたには
幸ありと 言ふぞかし

游子吟

雲外遙遙邁異郷
山川險阻路弥茫
宿心雖盛争償得
空在天涯欲断腸

旅人の歌

雲外 遙遙 異郷へ 邁 (ゆかんと) す
山川 險阻 (けんそ) にして 路 弥 (いよいよ) 茫たり
宿心 盛んなれど 争 (いかで) か 償 (はた) し得ん
空しく 天涯に在りて 腸を断たんとす

雲の向こう、遙か彼方の他郷へ旅しようとしている。
山や川は険しく、行く道は果てなく、さだかでない。
宿志はなおも旺盛だが、この先実現できるだろうか。
空しくも天涯に来てしまったが、今や断腸の思いだ。

「日本にいるドイツ人にこの詩を知っているかと、機会あるごとに尋ねた経験があるが、ほとんどのドイツ人から「ノー」「ドイツ

人なら、「ナイン」と言うだろうが、普通の日本人に通じない表現と見て避けたものか」と答が返って来た」とある。それはそうだろう。これは上田敏の訳によって名作となったのである。ドイツ語はつまびらかにしないが、原詩はそれほど名作とは思えない。

「この東洋的な抽象性に富む一篇の詩を知らないドイツ人を遺憾に思う」のは、むしろ鋭い指摘だが、だからこそ、ドイツではやらず、名訳のおかげもあってむしろ日本ではやったのであろう。

例えば、フランスの女流画家マリー・ローランサンは、日本でのほうが人気があり、蓼科のマリー・ローランサン美術館は、本国より充実している。その理由はともかく、こういう事例はままたまあるのだ。

さて、ここに至り、山本は漢訳に「翻案」という言葉をようやく用いている。「直訳」と「意訳」のときでもそうだが、これが翻案なら、以前のも翻案であろうし、個人的にはこれでようやく「意訳」くらいの気はするが、定義しがたく個人差もあるということによしとしておこうか。

また「ドイツ語に堪能で自ら漢詩を作り、又漢詩に訳した森鷗外ならば、完璧な翻訳ができたであろう」と結んでいる。

これも特に反対はしないが、文学作品の翻訳は一つの解釈であり、そういう点からすれば「完璧な翻訳」とは、試験の解答のようにには決まらないように愚考する。

また、鷗外はブッセを目にして訳さなかったのか、目にもしなかつたかわからないが、ドイツ語や漢詩がいくらできて、思い入れを持ってなければ、訳す気にもならないし、好きでないものを仮に

他から無理強いしても、それこそ「完璧な翻訳」を望むのは無理というものだろう。

そこまでのことを、この一節から言うのは、もしかしたら失礼かもしれないが。

さて、上田敏訳をもとに、これも口語押韻定型訳にしてみよう。

遠く 旅行(ゆ)く お山の向こう

たぶん幸福、住んでいるよう

ああ この私 旅に加わり

目を泣きはらし 帰った やはり

なおも 旅 行く お山の向こう

たぶん幸福 住んでいるよう

五 自作俳句の英訳

最後は自作の俳句の英訳四篇である。

名残りをし作手の里の八重桜

Loath to part from

The double cherry-blossoms

In Tsukude village.

一朶垂る牡丹桜は折れしかな

A single dangling spray

Of the double-petalled cherry-tree
I wonder who broke it.

現し世をなぐる寺の木蓮や

Up at the temple here

Quite free from mundane affairs

A pure magnolia —

借景は木の芽吹く山大空寺

The distant mountains

With trees in bud — just the garden

At the Taiku temple.

英訳のよし悪しとなると、率直に言つてわからない。だれかの訳と並べてであれば、その違いから、論じることができるが。

よって勘弁させていただく。

以上で、山本の「私信」は終わっている。

おわりに

まとまりは必ずしもよくはないところはあったが、得るところはかなり多くあった山本の「私信」であった。

(本学助教授・函館校)